

魔法のメガネ

八木田 宜子

「魔法のめがね」というタイトルの童話があるような気がしていいです。そこで、家じゅうの本棚をかきまわしてみました。そういうタイトルの本も、そういうタイトルの童話ののった本も、見つかりません。同業者の親友に電話をしてみました。「どうも読んだみたいだけど、作者名も、内容も、はつきりおぼえていない」という返事。

そのうちに、はっと気がつきました。「魔法のめがね」なんてタイトルは、あまり平凡すぎて、だからなのじゃないかな。あるかもしれないけど。

めがねには、もともと、魔法的な性格があるのです。だから、「魔法のめがね」なんて話は、書こうと思えば、いくらでも安易に書いてしまいます。それではおもしろくない。

リチャード・ヒューズの「クモの宮殿」という短篇集の中に、小さなガラスのかけらをのぞいてみたら、人間が人形に、人形が人間に見えて……という、ゆかいな話が入って

ますが、書く側としては、例えばそんなふうにも、変化をつけたくなるでしょう。

さて、めがねはなぜ魔法的か——。大学時代の友人にも、のすくぶ厚いめがねをかけた男の子がおり、彼がいつかこう言ったのを、今でも忘れられません。

「おれねえ、小学校の高学年のとき、はじめてめがねをつけてもらって、かけたんだけどさあ、あんなびっくりしたことってなかった。それまで、灰色だと思ってたまわりが、ものすくく明るくて、いろんな色があるんだものね」

私たちは、子どものめがねどころではない時代に育ちました。ようやくめがねをつくってもらうまで、彼は日常、たいへんな不便をしいられたことでしょう。でも、自分が他人と違うと思いつつ、その世界をあたりまえのようにも思っていたとき、はじめてめがねをかけて感じたおどろきは、本当に、どんなだったでしょう。

目のわるい者にとって、かけると世界が一変するめがねは、まさに魔法的ではありませんか。視力矯正用のめがねでなくてもいいのです。私たちにとっても、外界を見る窓は目しかないのですから、その目にめがねをかければ、外界は違

って見えます。

たとえば、お祭りなどで、オモチャの色めがねをよく売っていますが、あれをかけて、まっかな世界や、青い世界をのぞく幼児たちは、めがねの魔法を楽しんでいるのです。

また話が「魔法のめがね」にもどりますが、考えようと思えば、あらゆる種類の「魔法のめがね」が考えられますね。

色や形をかえてしまうめがねだけでなく、本当のことが見えるめがねとか、未来のことが見えるめがね、レントゲンみたいに人間の骨格まで見えてしまうめがねなど、きりがありません。

思い出しました。魔法のめがね。いえ、めがねに魔法をかける魔法つかい。故平塚武二氏の敗戦直後の作品「ウィザード博士」では、ウィザード博士という魔法つかいが、王さまのめがねをふいてあげると、めがねをかけなおした王さまは、何もかもが、まっかに見えるようになってしまっていました。

でも、この話と、オペレッタ「ホフマン物語」の中で詩人ホフマンがかかるめがね（人形が人間に見えるめがねで、ホフマンは、美しい人形を人間と思いこんで恋してしまう）く

らしいか、物語の中の魔法っぽいめがねは思い出しません。やはり、めがねは、よほど工夫をこらさないと、安易な小道具になってしまうからでしょう。

さて、今まで、もっぱら、めがねとおして外界を見る立場から、めがねが魔法的だと申ししてきましたが、めがねそのものの形態が果す役割にも、魔法的などころがあるように思えます。

目は心の窓、といいますが、目は人間の顔の中でいちばん目立つところです。濃いサングラスをかけただけで、もう、すっかりその人の感じが変わってしまいます。サングラスは、紫外線よけ、という目的のほか、変装用や、アクセサリーとして、つかわれますね。また、仮装舞踏会用のめがね、博多にわかなどの仮面……。しかし、外観をかえるためのめがね、またはめがね的なものは、同時に、かけている者に自己暗示をかける役割も果しているのではないのでしょうか。

いずれにしても魔法的なもの、それが、めがね。私自身も、常時めがねの魔法のお世話になっている人間です。

あ、「魔法のめがね」という本ですが、けっきょく、見つけられませんでした。
(童話作家)